

研究課題	ソーシャルワーカーの養成教育及び生涯教育における ツール開発に関する研究
研究代表者	坂本智代枝(人間学部アーバン福祉学科ソーシャルワーク専攻 教授)

① 研究の背景

昨今、教育学、看護学等の専門職の専門的力量を高めていくためのリフレクション(省察)に関する研究が多く見られるようになり専門職の養成教育等のツールや方法の開発も進められつつある。

そこで、本研究ではソーシャルワーカーが専門的力量を高めるためのリフレクション(省察)に関する研究を通して、ソーシャルワーカーがリフレクション(省察)機能をどのように構築しているのか、その構築過程を明らかにする。加えて、ソーシャルワーカーのリフレクション機能の構築過程に基づいたソーシャルワーカー養成教育や卒後の生涯教育のツールを開発することを本研究の目的とする。

社会福祉士及び介護福祉士制度の改正により、ソーシャルワーカー養成教育に実践的な教育が求められている。一方、実践現場ではソーシャルワーカーの職場定着の課題や実践的な研修が求められている。それには、スーパービジョンが有効であるものの(沖倉 2006)、我が国の実践現場にスーパービジョンの体制が根付きにくいのも現状である。そのような中、ソーシャルワーカーは、日常の自身の実践を振り返り複雑な状況に対応して、気づきを得て状況を変えていこうとする「省察力」を身につけていくことが必要となる(南 2007)。

② 文献検討

国外における研究の動向は、リフレクション(省察)を繰り返し行うことで専門的力量を高めていく専門職のことを Schön,D(1983)は、「省察的实践家」として称している。それを契機に教師教育、看護学教育、ソーシャルワーク教育にも援用されつつある。しかし、国内の研究は教師教育(秋田喜代美 1996、伏木久始、山口恒夫、越智康詞他 2007、林えり 2008 他)、看護教育においては理論研究(本田多美枝 2003)、ソーシャルワークにおいては概念の整

理(南 2007)、文献検討の整理(吉川、福田、村田 2007)、スーパービジョンへの援用(沖倉 2006、塩田 植田 2010)、ソーシャルワーカーを対象にした研究では、ソーシャルワーカーの成長に関する研究(保正 2003,2005,2006、横山 2006、鈴木 2006、)はあるものの、「リフレクション(省察)」機能の構築における実証的な研究は行われていない。

「リフレクション(省察)」に関する実証的研究は、看護師を対象にした実証的研究で多く積み上げられている。(小林他 2002、山口他 2004、児玉 2005、池西他 2007)看護学における先行研究は、ソーシャルワークの研究に多く示唆を得るものが多い。

これまでのソーシャルワーカーの実践経験とソーシャルワーカー養成教育及び、現場のソーシャルワーカーのスーパービジョン、コンサルテーションを通して、実践現場の日常の実践からソーシャルワーカーが「リフレクション(省察)」活動を繰り返すことでソーシャルワーカーとして成長するのではないかと考えるように至った(坂本 2009)。しかし、外部で開催されるソーシャルワーカーの養成教育や研修はスキル習得や新たな専門知識習得に偏っているため、ソーシャルワーカーが実践活動において「リフレクション(省察)」機能を構築するには、ソーシャルワーカー個人の資質や力量に任されているのが現状である。

③ 目的と研究方法

そこで、本研究では精神保健福祉士でありソーシャルワーカー経験5年以上のソーシャルワーカーが、実践の中で「リフレクション(省察)」機能がどのように構築されてきたのかというプロセスを明らかにする。そこから仮設生成された理論をもとに今後のソーシャルワーカーの養成教育及び生涯教育のツールを開発するための示唆を得たいと考えた。

本研究の分析焦点者は、精神保健福祉士でソーシャルワーカー経験5年以上ある者で、医療機関で勤務している者5名及び地域の事業所で勤務している者5名

の計 10 名である。インタビューガイドに沿って、半構造化面接を実施し、倫理的配慮の上 IC レコーダーに録音したデータをトランスクリプト化して、質的分析を行った。分析方法は、ソーシャルワーカーが、実践の中で「リフレクション（省察）」機能がどのように構築されてきたのかというプロセスを明らかにするため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。分析方法の選択理由として、ヒューマンサービスの領域であることと、「リフレクション（省察）」機能の構築という「プロセス性」を明らかにする上で、適した研究方法であると考えた。

④ 研究の結果

データから概念生成したものを精査して暫定的に採用した概念は、28、カテゴリーは 7 である。その中で最も中心的なコアとなる概念は、＜違和感に向き合う＞で、コアカテゴリーは【自己内省力の醸成】である。

分析の結果から、以下のようなストーリーライン(全体像)を生成した。なお、概念は＜ ＞、カテゴリーは【 】、コアになっている概念とカテゴリーは下線している。

ストーリーライン

ソーシャルワーカーがリフレクション機能を構築するプロセスは、【積極的な自己投影】によって、利用者や先輩スタッフ等とかがかわるが、【複雑な状況に対する混乱】に出会い、【持っているコンピテンシーの限界】を実感する。＜違和感の柵上げ＞をしながらも、＜違和感に向き合う＞ことから逃れられずに、【自己内省力の醸成】が転換点となり、＜自己内対話＞を経て、【自己批判分析】と【他者批判分析】を繰り返し統合して、【新しいコンピテンシーの実践】を通して、【不確実な状況へのチャレンジ】へと至っていた。

このプロセスにおいて、特に注目すべきカテゴリーは、コアカテゴリーである。

コアカテゴリーである【自己内省力の醸成】プロセスである。このプロセスは、＜状況の混乱＞に出会い、＜違和感の柵上げ＞しながら実践しようとするが、＜状況の複雑化＞に向かう中で逃れられずに＜違和感に向き合う＞ことに取り組むプロセスである。

⑤ 研究の課題と発展

現在、ソーシャルワーカーを養成するための社会福祉及び精神保健福祉士のカリキュラムは複雑な社会構造や社会の課題に対応するべく、多くの知識と技術を学ぶ内容になっている。近年、両福祉士の改正に伴い、実習・演習時間は増えたものの体験型及び、個別支援計画を作成するプロセスを学ぶ試行型になっているのも否めない。

しかし、実習生やさらに卒業後に求められるソーシャルワーカーに求められるものは、予期せぬ出来事や＜状況の混乱＞、【不確実な状況にチャレンジ】するための【自己内省力の醸成】が求められていることがわかった。

ソーシャルワーカーの知識や技術を活用するためのソーシャルワーカーの【自己内省力の醸成】を高めるためのリフレクション機能への教育的アプローチに基づいた教授内容や実習事前・事後学習及び卒後教育を強化していく必要があることがある。

本研究の結果は、あくまでも暫定的な結果であるため、理論的飽和化するまで、継続的比較分析を行い、より明確なプロセスと教材に向けて研究を継続していく必要がある。

【引用文献】

- ・秋田喜代美（1996）「教師教育における『省察』概念の展開——反省的実践家を育てる教師教育をめぐる」『教育学年報』（通号 5），pp.451～467.
- ・林えり（2008）「教師教育における『省察』概念の諸相——批判理論からの『省察』概念に注目して」『人間発達研究』（30），pp.33～52.
- ・伏木久始，山口恒夫，越智康詞他（2007）「蓄積する体験と深化する省察による実践的指導力の育成を目指した教育養成プログラムの実践」『日本教育大学協会研究年報』25，pp.137～149.
- ・保正友子他（2003）『成長するソーシャルワーカー』筒井書房.
- ・保正友子（2005）「ソーシャルワーカーの専門的力量についての予備的調査」『社会福祉実践理論研究』，14,27-40.
- ・保正友子他（2006）『キャリアを紡ぐソーシャルワーカー』筒井書房.
- ・本田多美枝（2003）「Schon理論に依拠した『反省的看護実践』の基礎的理論に関する研究（第

- 1部)理論展開」『日本看護学教育学会誌』13(2), pp.1~15.
- 本田多美枝(2003)「Schon理論に依拠した『反省的看護実践』の基礎的理論に関する研究(第2部)理論展開」『日本看護学教育学会誌』13(2), pp.17~33.
 - 本田多美枝(2006)「『反省的看護実践』の枠組みとモデル図の提案」『看護教育』47(7), 医学書院pp.570~577.
 - 池西悦子 田村由美 石川雄一(2007)「臨床看護師のリフレクションの要素と構造」『神戸大学保健学紀要』第23巻, pp.105~125.
 - 南彩子(2007)「ソーシャルワークにおける省察および省察学習について」『天理大学社会福祉学研究室紀要』(通号9), pp.3~16.
 - 小林孝代 小野ゆかり 栗山真由美他(2002)「新人看護師のリフレクション体験と先輩看護師の関わり」『日本看護学会論文集, 看護総合』, 33,12-14.
 - 児玉由美子(2005)「新人看護師が直面した臨床体験の意味づけ:リフレクションの分析」『日本看護学教育学会誌』15,106.
 - 沖倉智美(2006)「障害者福祉施設におけるスーパービジョンに関する考察——『反省的実践家』としてのソーシャルワーカーを目指して」『大正大学研究紀要(人間学部・文学部)』(通号91), pp.294~268.
 - 坂本智代枝(2009)「精神史保健福祉士がピアサポーターを支援することを通して成長するプロセスに関する研究」高知女子大学博士学位論文, p.187.
 - Schön,D.(1983) The Reflective Practitioner Basic Books (=佐藤学 秋田喜代美訳 2007「専門家の知恵」ゆみる出版).
 - Schön,D.(1987) Educating the Reflective Practitioner Jossey Bass.
 - 塩田祥子 植田寿之(2010)「ピア・グループ・スーパービジョンの意義と課題に関する考察」『花園大学社会福祉学部研究紀要 第18号』, pp.173~182.
 - 鈴木真理子(2006)「女性ソーシャルワーカーのキャリア発達とライフコース」『埼玉県立大学紀要』8 pp.51~61.
 - 吉川公章 福田俊子 村田明子 須藤八千代(2007)「ソーシャルワーカーの成長に関する研究の方向性と課題」
 - 横山登志子(2008)『ソーシャルワーク感覚』弘文堂.

- 山口智美 田邊満智子 寺田りさ 南理香(2004)「外回り看護師の専門性についての一考察」『日本手術医学会誌』25-1,pp.64~66.